

### \*大きな真空管を収蔵

2012年3月で国立天文台を退職された太陽観測所のM君が珍しいものがあると表記の大きな真空管をアーカイブ室に届けてくれた。今はこの1本しか残っていないが何本かあったそうだが、貴重な最後の1本ということである。5極管で高さが陶器の足を含めて約38cmもある。真空管のガラス管の部分の太さが82mmある(写真1)。真空管のガラスの側面には「JAN-CAHG-5945 MADE IN USA 5933 CHATHAM ELECTRONICS」書かれ、下部の金属部分に「RESERVOIR SETTING 4.1 VOLTS」と書かれている。届けてくれたM君もどんなところで何の目的で使われていたものかまったく知らないのだそうだ。非常に珍しいものなので、とにかく捨てないでアーカイブ室に届けてくれたのである。



写真1 巨大な真空管

金属部分の張り紙には、「HAZARD WARNING Hydrogen Thyratrons operating at high anode voltage emit x-ray from a diffuse source on the anode. The x-ray beam is of maximum intensity opposite the anode-grid region, and falls off sharply above and below this point. Proper precaution should be taken in the installation so that operating personnel and x-ray sensitive equipment are shielded adequately from the x-rays. CHATHAM ELECTRONICS Division of Tung-Sol Electric Inc. LIVINGSTON, N. J.」と書かれている。この真空管のソケットは太い足2本、細い足2本である(写真2)。ソケットの上面は四角(写真3)で、その一辺には「Toshiba」と刻印がある(写真4)。

筆者はこの真空管をアーカイブ室新聞の記事にして紹介するが、この種の電気部品についての知識がない。この記事を読んだ読者の中からこの真空管はどのように使われたかの情報が入ることを期待するのみである。とにかく非常に珍しいものと思われるのでその道の人にはすぐその由来、用途が分かるものと期待している。

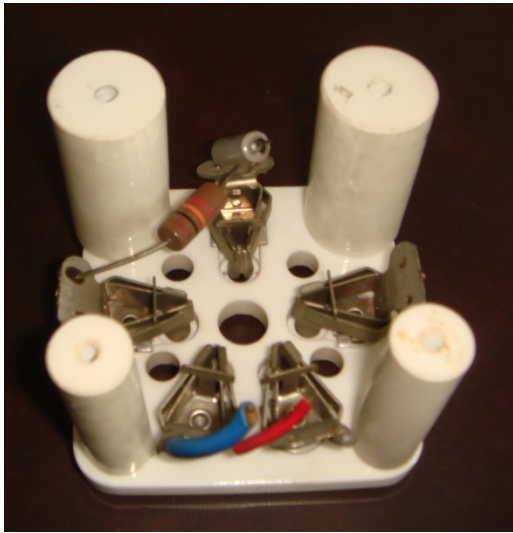


写真2 ソケットの4本の足

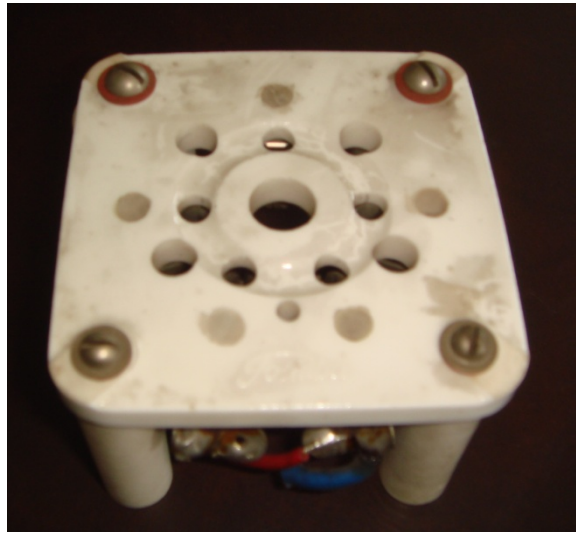


写真3 ソケット面



写真4 Toshiba の文字



写真5 真空管の5本の足



写真6 真空管の先端部

この真空管があった場所は、1920年（大正9年）に建設された東京天文台の太陽分光写真儀室（通称オバケ）にあったそうである。この太陽分光写真儀室ではサイデロスタットで太陽光を導き、カルシウム K 線で太陽像を撮影していた。そのデータが最近国立天文台太陽観測所ホームページに公開されたと聞いている。この太陽分光写真儀室は現在の東京大学理学部天文学教育研究センターの敷地にあった。その分光器は筆者が分光器資料館にしている太陽塔望遠鏡の半地下の分光器室に展示している。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、[arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp](mailto:arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp)